

## 臨床研究

## 過去5年間の当科受診症例の臨床的検討

秋本 祐基, 宮手 浩樹, 松浦 利幸, 宮澤 政義

## Clinical Investigation on Patients During the Past 5 Years

Yuuki AKIMOTO, Hiroki MIYATE, Toshiyuki MATSUURA, Masayoshi MIYASAWA

**Key Words :** Clinical Investigation, Department of Dentistry  
Oral and Maxillofacial Surgery

## 緒 言

当科は1988年4月より口腔外科疾患症例や全身疾患を有する症例の治療に重点をおいてきた。また、地域医療機関との連携強化を図ることで、道南において二次、三次歯科医療を担い、地域住民への安全な医療の提供を行うことを目指してきた。今回、我々は最近5年間の患者の実態や動向を把握するために検討を行ったので報告する。

## 対象および方法

対象は2003年1月から2007年12月までに当科を受診した新患患者12,144名と同期間に入院加療した1,722名で、調査項目は1) 1日平均患者数と紹介率, 2) 疾患別内訳, 3) 患者年齢別, 疾患別分布および性別, 4) 入院症例数と平均在院日数, 5) 入院手術の麻酔管理法と疾患別内訳などでこれらについて臨床的検討を行った。

## 結 果

## A) 外来受診症例

## 1) 1日平均患者数, 1日平均新患数と紹介率 (図1)

1日平均患者数は53.4名で1日平均新患数は8.64名であり、紹介率は35.7%だった。新患数はあまり変化がないのに対して紹介率は上昇、1日平均患者数は減少傾向を示していた。

## 2) 疾患内訳 (図2)

歯の疾患を除く疾患内訳では口腔粘膜疾患

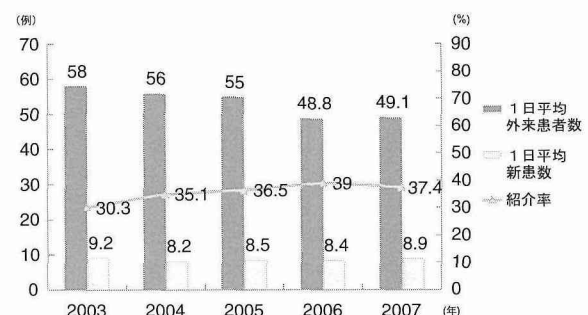


図1 1日平均患者数と紹介率

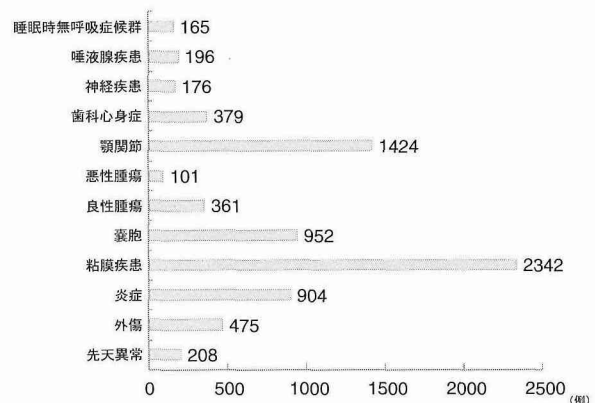


図2 歯の疾患を除く疾患内訳 (n=15366)

粘膜疾患が2,342例と最も多く、ついで顎関節疾患が1,424例、嚢胞が952例、炎症が904例、外傷が475例の順であった。歯の疾患は6,781例でそのうち埋伏歯は1,779例であった。

が2,342例と最も多く、ついで顎関節疾患が1,424例、嚢胞が952例、炎症が904例、外傷が475例の順だった。なお、歯の疾患のうち根尖性歯周炎や辺縁性歯周炎などは5,002例で、埋伏歯は1,779例だった。

## 3) 患者年齢別, 疾患別分布と性別 (図3, 4)

患者年齢分布では60歳代が2,006名、20歳

代が1734名と二相性のピークがみられた。また、男性が39%、女性が61%で女性の頻度が高くなっていた。

年齢別主な症例の内訳では、10歳未満では外傷が192例(35%)と最も多く、嚢胞が60例(11%)、埋伏歯36例(6.2%)だった。この年代では上顎正中過剰埋伏歯と粘液嚢胞が多かったが、他の年代では智歯埋伏と歯根嚢

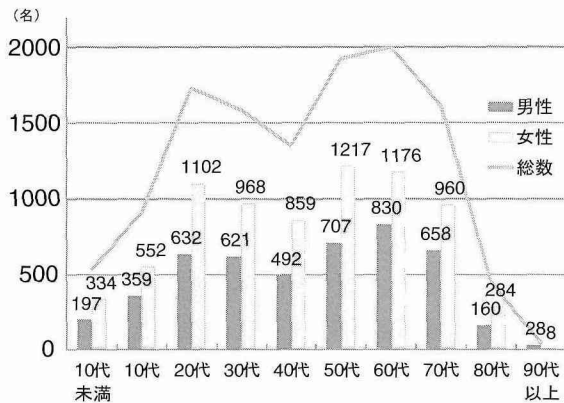


図3 患者年齢別内訳および性別割合 (n=12144)

60歳代が2,006名、20歳代が1,734名と二相性のピークがみられた。男性が39%、女性が61%で女性の頻度が高くなっていた。

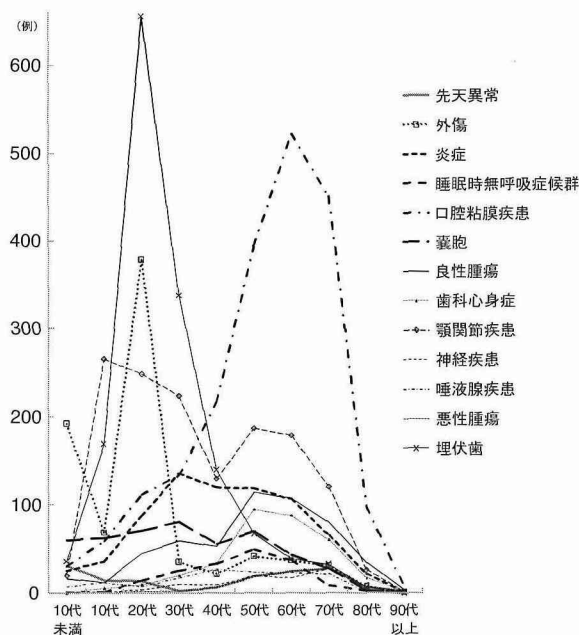


図4 年齢別主な症例内訳

20歳代では埋伏歯、外傷、顎関節症の増加が、60歳代では口腔粘膜疾患、良性腫瘍、歯科心身症、炎症の増加が、図3における受診患者のピークの要因であった。

胞が多かった。また10歳代より顎関節疾患が265例(29%)と増加し始めていた。20、30歳代までは埋伏歯が多かった。40から80歳代では口腔粘膜疾患が最も多かった。また、40、50歳代の口腔粘膜疾患では口腔乾燥症、シェーグレン症候群疑い症例が増加していた。また、睡眠時無呼吸症候群は40、50歳代で多く認められた。80歳代以上では埋伏歯の割合は急速に減少し、口腔粘膜疾患の割合が増加傾向にあった。

## B) 入院症例

### 4) 入院患者数(図5)

入院患者数は平均344.4名で平均在院日数は7.22日だった。

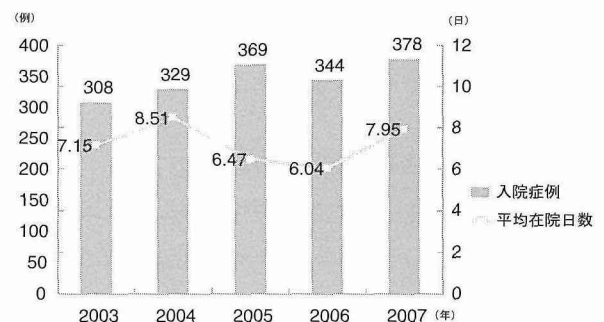


図5 入院症例数と平均在院日数 (n=1722)

平均入院患者数は344.4名で平均在院日数は7.22日であった。

### 5) 手術管理方法(図6)

手術管理方法では、5年間の総数として静脈内鎮静法併用下局所麻酔(IVS)が1,075件で、全麻下での管理が525件、局麻単独では42件だった。なお、当科ではIVSの多くを1泊2日入院で行っており、1年間に平均すると、全身麻酔は104.8件、IVSが215件だった。

IVSでは、604例(67%)が埋伏歯の抜歯で、他の施行例は多数歯抜歯・比較的小さい顎骨嚢胞あるいは腫瘍切除・顎切や骨折後のミニプレート除去・単純な骨折の整復固定・インプラント除去・消炎手術や有病者・障害者の歯科治療だった。

全身麻酔症例の疾患別内訳を見ると過去5年間の総計では嚢胞が144例(27.4%)と最も多くついで炎症が119例(22.7%)、良性腫

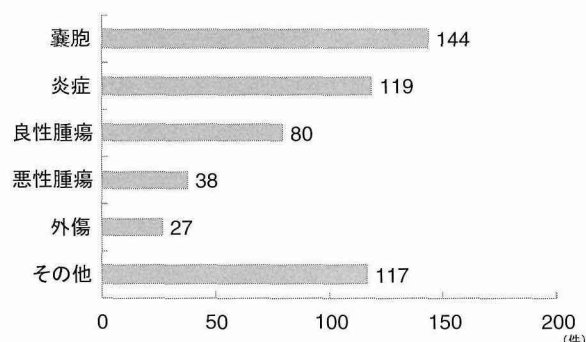


図6 全身麻酔症例の疾患別内訳 (n=525)

嚢胞が144例(28%)と多くついで炎症が119例(24%)、良性腫瘍が80例(15%)であった。その他の症例は顎堤萎縮が22例(4.2%)、唾液腺疾患が21例(4.0%)、顎変形症が19例(3.6%)、抜歯が16例(3.0%)、変形性顎関節症が7例(1.3%)等であった。

瘍が80例(15.2%)だった。炎症では顎骨髄炎の消炎手術が88例と炎症疾患の73.9%を占めた。

#### 6) 睡眠時無呼吸症候群患者(図7)

睡眠時無呼吸症候群患者は163例で50歳代が最も多く、男性が81%と大多数を占めていた。

#### 7) シェーグレン症候群疑い症例(図8)

過去5年間に受診したシェーグレン症候群疑い症例は385例で60歳代が最も多く、女性が92%を占めた。

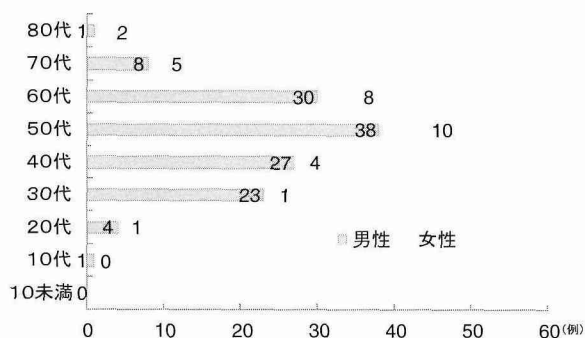


図7 睡眠時無呼吸症候群患者の年齢分布と性別内訳 (n=163)

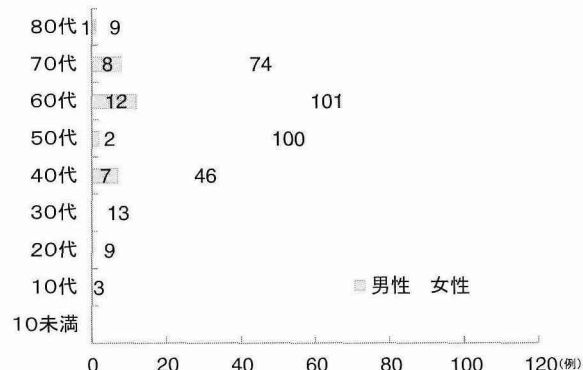


図8 シェーグレン症候群疑い患者の年齢分布と性別内訳 (n=385)

## 考 察

歯科医療においても機能分化が推進され、病院歯科は一般歯科や内科との病診連携に基づく二次、三次歯科医療機能を有することが望まれている。当科も1988年より口腔外科疾患に重点を置き、道南地域での二次、三次歯科医療を担ってきた。今回、当科の現状を把握するため過去5年間の受診患者および入院患者動向について臨床統計的に検討した。

2003年から2007年に当科を受診した新患数は12144名、1日平均患者数は53.4名で1日平均新患数は8.64名だった。紹介率は35.7%で比較的高い水準で推移しており、他施設の報告と比較して病診連携は良好だった。<sup>1)2)5)</sup> また、年次ごとの推移をみると、新患数は一定であるが1日平均外来患者数はわずかに減少していた。これは、口腔外科的診療以外は紹介元等に積極的に逆紹介していることが要因と考えられた。疾患内訳では粘膜疾患が2,342例と最も多く、ついで顎関節疾患が1,424例、嚢胞が952例、炎症が904例、外傷が475例の順だった。この疾患の割合は過去5年間ではほぼ一定だった。患者年齢内訳では石井ら<sup>1)</sup>と同様に60歳代と20歳代に二相性のピークが認められた。その疾患内訳をみると、20歳代では歯の疾患が1,060例(49%)と多く、外傷が378例(11%)を占めた。20歳代での患者数のピークは主に智歯抜歯などの歯の疾患や外傷・顎関節疾患の増加が要因で、60歳代のピークは口腔粘膜疾患、良性腫瘍、歯科心身症、炎症の患者数の増加が要因であった。

入院患者数は1722名で平均在院日数は7.22日だったが、1泊2日入院によるIVSの件数が多く、平均在院日数が短縮されていると考えられた。全身麻酔症例525件のうち、炎症が119件(22.7%)と他の施設からの報告と比較すると大きな割合を占めていた。このうち顎骨骨髓炎は88例で、当科では本疾患に対して手術的治療法を多用しているためと思われた。<sup>1)2)5)</sup>

睡眠時無呼吸症候群患者は50歳代が最も多く、男性が81%と大多数を占めていたが、その多くが他院医科からの紹介患者で、当科としては主にスリープスプリント療法を担当した。

シェーグレン症候群疑い症例では種々の報告と同様に50歳代と60歳代が多く女性が92%を占めたが、その多くが当院整形外科のリウマチ専門医からの紹介であった。<sup>3)6)</sup>

当科は病診連携のもと口腔外科疾患を数多く扱っており、シェーグレン症候群や睡眠時無呼吸症候群に対しても積極的に取り組んできた。今後も、歯科および医科との密接な連携により病院歯科口腔外科としての責務を果たす必要があると思われた。

## 結 語

2003年から2007年までの1日平均患者数は53.4名で1日平均新患数は8.64名であった。

受診患者は20歳代と60歳代にピークがあった。20歳代では埋伏歯や外傷・顎関節疾患の増加が要因で、60歳代のピークは口腔粘膜疾患、良性腫瘍、歯科心身症、炎症の患者数の増加が要因であった。平均入院患者数は344.4名で平均在院日数は7.22日であった。

全身麻酔症例では嚢胞が144例(28%)と多く、炎症が119例(24%)、良性腫瘍が80例(15%)であった。

## 参 考 文 献

- 1) 石井良昌 他：蛸名総合病院 歯科・歯科口腔外科 11年間の入院患者の臨床的検討  
Hosp. Dent (Tokyo) 19: 49-52, 2007
- 2) 玉城廣保：国立名古屋病院 歯科口腔外科  
Hosp. Dent (Tokyo) 14: 133-140, 2002

- 3) 安細敏弘：口腔乾燥症の臨床 第1版, 2008  
医歯薬出版株式会社
- 4) 宮澤政義 他：北海道病院歯科の現状(第二報) 道歯会誌 57: 213-216, 2002
- 5) 神谷祐司：姫路赤十字病院 歯科口腔外科  
Hosp. Dent (Tokyo) 14: 55-58, 2002
- 6) 菅井進：シェーグレンと共に 第1版, 2007  
前田書店